
温故知新～ウラバン！前史～

万墨人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

温故知新〜ウラバン！前史〜

【Nコード】

N0902S

【作者名】

万墨人

【あらすじ】

これは『ウラバン！〜SF好色一代男〜』の世界観説明のための短編です。『ウラバン！（略）』の世界観が判らない、という人は、この短編を読んでくれば、なぜあのような世界観になったのか、納得いただけると思います。また、これから最初に読んでもらって、興味がわいたら是非、本編の『ウラバン！』を御愛読下さい。

選挙演説

スピーカーから引つきりなしにがりたてる候補者の演説に、学生は内心むっと顔を顰めた。

だが、素知らぬ振りを装い、立ち止まることなく歩き続ける。

最近の若者らしく、野暮ったい服装で、ひよろりとした身体つきに、鼻には黒縁の眼鏡を掛けている。眼鏡は伊達で、若者は特に近視というわけではないが、二十世紀後半 昭和四十年代の若者の格好を真似している。

選挙演説の音量は相当に煩い。

できたら耳を塞ぎたいところだったが、そんな真似をしたら、演説に聞き入っている人間に睨まれると我慢した。

「大江戸党、大江戸党を、よろしくお願いいたします！ 世界を江戸に！ 東京を江戸と改め、徳川家のご子孫に、征夷大將軍に御昇り頂くことを切に、祈っております！」

駅前には選挙運動のための街宣車が停車して、屋根に設けられた演壇には「大江戸党」の候補者がずらりと居並び、マイクを握りしめ、真っ赤な顔で見上げている聴衆に向けて夢中になって語り掛けている。

背後には去年から採用された、ホログラフィを使った選挙パネルが、空中に候補者の顔を大写しに映し出している。

候補者は全員女性も含めて、和服着用で、紋付羽織袴の正装だ。さすがに月代丁髷さかやきちょんまげはしていないが、男は髪の毛をびっちりオール・

バックにして、女性候補者は日本髪を思わせる髪型で、しとやかに控えている。聞き入っている聴衆の中にも、同じような和服の身なりがちらほら、混じっている。

総選挙が近い。

当然、町にはあらゆる場所で、熱っぽい選挙演説が、道行く人に必死に訴えかけている。

学生が前を通りすぎた【大江戸党】というのは、最近思想の主流に躍り出た「ネオ封建主義」を奉じる政治団体である。

【大江戸党】の主張は、日本の政治を真に地方分権にするには、江戸時代に戻り、幕藩体制を復活させるしかない、というものである。朱子学と幕藩体制を復活させ、江戸時代の安定した政治を呼び戻すのが狙いだ、と主張している。

【大江戸党】

【大江戸党】の主張はこうだ。

江戸時代、日本は独自の、安定した社会を作ってきた。

三百年間、他の国に侵略もせず、また、されることもなかった。自然を大事にし、徹底リサイクル社会で、環境破壊とも無縁であった。身分の違いもあつたが、同時期の他の国に比べれば、よほど緩やかで、庶民はそれなりの自由を謳歌していたのだ。というのが主張である。

民衆飢餓史観 江戸時代の百姓は、作った米を統治者に取り上げられ、一粒も口にできず一生を送った。は否定されている。統治者が百姓の米を取り上げたとしても、僅か人口の一割にも満たない侍たちが、総ての米を食いつくすことなどありえない。米は流通され、結局は農民の口に入ったのである。

有名な天明・天保飢饉では、西国においては豊作で、農民が飢えた原因は流通に問題があつたから、というのは定説である。

科学技術に遅れたという批判には、当時の科学技術が大幅に発展したのは、明治維新後の世紀末からで、江戸時代の医学、数学、天文学などにおいては、西欧と比肩するほどに発達していたと答える。

明治維新を迎え、当時の植民地を基にした帝国主義に触れ、日本は変質した。侵略的な思想が蔓延し、足尾銅山などの鉱毒事件により環境破壊が始まり、ついには太平洋戦争を引き起こし、二個の原爆によって無条件降伏に至った……。

敗戦後、日本は遮二無二、復興を目指し、経済大国を目指したが、さらなる環境破壊も呼び寄せた。

総て明治維新という、政治の失敗が招いたのだ。だから日本は明治維新以前の状態に戻すべきだ、というのが主張である。

鎖国もするのか？ という問いには、【大江戸党】はこう答えた。

江戸時代が鎖国制度だった、というのは間違いである。国を閉ざしたのは、あくまでもキリスト教の、しかもカトリックの国々に対してであり、プロテスタントのオランダとは出島を通じて貿易をしている。

【大江戸党】の目指すのは、世界中に「ネオ封建主義」の思想を広め、世界の中心に新たに幕府を置いて、人々の象徴として徳川家の子孫による征夷大將軍を置く。

世界中が日本になれば、鎖国の必要もないし、戦争を引き起こす心配も絶対はない！ と。

カセット

馬鹿らしい、と学生は腹の中で笑った。

そんなこと、できるわけない！ 世界を日本にする、など、夢物語もいいところだ。確かに今の世の中は、懐古趣味が流行だ。第一、学生自身、昭和時代に夢中で、服装もその頃の学生の雰囲気を実に真似している。

しかし、いくらなんでも、江戸時代まで戻るなんて、やり過ぎである。

学生はポケットから携帯型のカセット・テープ・レコーダーを取り出した。目の玉の飛び出るような金額だったが、当時の若者が聞いていたカセット・テープというものを使った音楽プレイヤーである。

当時の若者は皆、持ち歩いていたことを知り、どうしても欲しくなり、八方に手を尽くして探し出した逸品である。

なにしろ、このプレイヤー一つで、最新型の電動三輪車が買えるほどの金額だ。手に入れるためには長期のローンを組まねばならなかったが、価値はあったと思っている。

耳にヘッド・フォンをつけ、音量つまみを捻ると、湿っぽい、当時流行のフォーク・ソングが聞こえてくる。

音楽で選挙演説を掻き消しながら、学生は急ぎ足になった。

肩から提げたバッグには、今日これから提出するための、卒業論

文準備稿の入ったファイルが大事にしまっている。ファイルを指導教授に提出して、了解を取ればあとは一気呵成に論文を仕上げ、卒業を待つのだ！

指導教官

指導教授は学生のファイルを受け取り、自分の端末に読み込ませ、モニターに映し出して黙って眺めている。

学生は微かな興奮に、顔が火照るのを感じていた。

いよいよだ……。いよいよ今日、この時、結果が出る……。

指導教授は前年に助教授から昇進して、教授になったばかりである。したがって、与えられた研究室も新しく、運び込まれた様々な資料や、機材で室内は乱雑を極めている。

年齢は、そう若くはない。四十代前半か。それでもこの年齢で、助教授から正教授に昇進するのは、稀な例外だと噂されている。

鶴のように痩せていて、髪の毛はかなり薄くなっているのが、教授を年齢以上に老けて見せている。落ち窪んだ眼窩から、二つの大きな目玉が、学生の提出したファイルの中身をチェックしている。

教授の骨のような指先が、モニターの一部を指し示した。

「この静止画像は？ 大分、古いものようだが……」

ようやく口を開く機会を得て、学生はやや前のめりの姿勢になって話し出した。

「ええ、当時の雑誌をスキャンして取り込んだものです。それは」と教授の背後から腕を伸ばした。指先を写真の中央に当てる。

「当時？ 族？ と呼ばれた若者グループの集会場面です。中央に立つ

ている？ツナギ？の男がグループのリーダーです。リーダーは？頭^{ヘッド}？とか？酋長^{チーフ}？とか呼ばれていたようです。どうも雑誌の保存状態が悪く　なにしろ昭和時代は、百年以上の大昔ですから　読み取れない部分もあって、用語にはあまり自信はないのですが」

腕組みをしてモニターに見入っている教授の横顔を見て、学生の口調は尻すばみになった。教授の横顔には、ありありと不満が表れている。

課題

「君には別の課題を与えてあつたはずだが。昭和時代の交通状況と自動車の若者世代普及についての研究……だったね。確か」

ぎろり、と教授は鋭い目付きで学生を睨んだ。

学生は首を竦めた。

教授の視線には「なぜ自分の提示した課題を進めない？」と非難が込められている。

「ええ。教授の提示された研究を進めているうち、当時の若者風俗に興味が移りまして」

学生は必死になつて唇を舌で湿し、説明を続けた。

「？ツツパリ？？ヤンキー？と呼ばれる若者の一群が地方都市を中心に存在したのです。若者たちは、思い思いにバイクや車を改造して、当時の重要な風俗を形成していました。？ツツパリ？？ヤンキー？と呼ばれる一団は、当時の大きな社会問題を引き起こしましたが、文化にも大きく影響を与えていたことは、はっきりしています。ですから」

学生の説明を、教授は手を振って遮った。

「もういい！ 君は脱線した。わたしの提示した課題を無視してね。これでは、卒業は無理だな。諦めることだ」

教授の口調は辛辣で、突き放すものだった。学生の額に薄っすらと汗が噴き出す。

「それでは……？」

教授は微かに顎を引いた。

「そう。わたしの提示した課題を真っ直ぐ、真面目に進めることが、

君の卒業の絶対条件となる。判るね？」

「はい、判りました」

学生は弱々しく答えた。

恒星間宇宙船

指導教授の研究室を辞去して、大学の構内を歩く学生の胸は、怒りで荒れ狂っていた。

あの痩せ瓢箪、鶴のミイラめ！ 俺の研究を、まるっきり無視しやがった！ なにが提示した課題だ！ 糞食らえ……。

学生は立ち止まった。

空を見上げる。蒼穹に、真昼間から、星が見える。

いや、星ではない。

地球と月とのトロヤ点で組み立てを続けている、人類初の恒星間宇宙船の勇姿である。

宇宙船は巨大で、昼間でも見えるほど大きい。

直径千キロに及ぶ反射鏡　反射能一に限りなく近く、紙よりも薄い軽量の素材でできている　が宇宙船の大部分を占める。

反射鏡には太陽近くに配置されたレーザー砲からビームが送られ、光の圧力を受け、最終的に光速度の二十パーセントの速度で宇宙空間を突き進むのだ。数百年後には宇宙船は目的の星系に進入し、もし星系内部に人類の殖民に適した条件の惑星があれば、反射鏡の向きを変えて、惑星に近接軌道をとる手筈である。

宇宙船の内部には、冷凍された受精卵が百万単位で眠っている。もし殖民に適した惑星が存在すれば、人工胎盤により育成をはじめ、育てられた殖民者が地球以外の惑星に降り立つのだ。

殖民計画を推し進めるためのプログラムは、コンピューターに総て揃っている。住居、食糧、生産などのコンピュータを自動で生成し、人類はコンピューターの助けで惑星に広がっていく。

軌道上で組み立てられているのは最初の一隻であった。計画では同じような宇宙船を次々と組み立て、送り出す。

学生は肩を竦め、視線を戻した。

宇宙計画には興味は全然ない。どうせ恒星間宇宙船には、生きて
いる人間は乗り込めないのだ。目的地に達するのは数百年後だし、
学生自身には、何の関係もない。

それより、せっかくの研究ファイルをどうしよう。教授の提示し
た課題の研究を進めるには何の価値もない。

学生はもう一度、肩を竦める。

しかたない。長いものには巻かれろ、だ。

学生は自宅へと足を向けた。

長屋暮らし

「お帰り」

自宅前に近づくと、植木に水をやっている隣の住人が声を掛けてきた。

隣人は退職した六十がらみの老人で、にこやかな笑みで学生を出迎えてくれる。学生は「あ、どうも」と口の中で返事をして、軽い足取りで自分の部屋の前の入口に近づいた。

向かい合わせに、十軒の部屋が連なっている長屋である。

最近の流行で、学生や、挨拶を掛けてきた老人のような独身者の住居は、江戸時代の長屋を模した構造になっているのだ。

もちろん、水洗設備やエアコンは完備されているから、暮らしは快適である。

大体において、人々の暮らしは懐古趣味に染められていた。学生の暮らす現代風長屋もそうだし、気軽に声を掛け合う習慣もそうだ。昔の暮らしを再現しようと、人々は細心の注意を払って暮らしていた。

老人が熱心に世話をしているのは万年青おもとという植物で、向かい側では朝顔を世話している。江戸時代では大衆は色々な植物を育て、変わった形になると、高額で取り引きされることもあったという。

もっとも、知識を仕入れる先は、所謂“時代劇”で、プロの時代考証家に言わせると、間違いだらけで見えていられないと文句をつけてくるが。

見上げる空には巨大なビルがよきによきと立ち並んでいるが、なるべく昔の景観を取り戻そうと、デザインは和風の味付けがなされていた。木目を思わす塗装に、屋根瓦に似た上部構造。ちよつと見ただけでは本物の和式建築なのか、新素材を利用した新しい建築なのか、見分けがつかないほどだ。

がらがらと引き戸を開け、三和土にスニーカーたたきを揃えて置くと、四畳半の部屋に上がりこむ。漆喰の壁に古びた木材の和風建築。古びているのは見かけだけで、本当は新素材をふんだんに使用した、新築物件である。

エアコンなどは目立つ場所にはなく、巧みに木目を利用して送風口があるから、一目ちらつと見た程度では判らない。

屋根瓦は太陽光発電装置を兼ねていて、個人の住居には充分な電力を供給できる。

情報端末

部屋の中で唯一つ、違和感を発散しているのは小さな情報端末である。つるりとした外観の情報端末は、部屋の中でそこだけ最新のテクノロジーを主張していた。

自分の情報端末装置を見るたび、学生はやっぱり部屋に調和した、昭和時代のテレビに似せた端末に買い換えようかと迷う。

あれなら部屋の雰囲気にはぴったりで、画面をモノクロに調整すれば、益々昭和時代に戻ったようで気分が良いだろう。友達の何人かはすでに、そういったデザインの端末に変更していた。遊びに行くたび自慢されるので、学生は少々腹を立てていた。

「情報、ニュース」

学生が命令すると、端末は学生の音声を認識して起動した。画面がニュース番組になって、最近の情報が次々と展開される。見るともなく画面に目をやり、学生は部屋の隅に立てかけてある白い塗装のギターを手にとる。

ぼろん、ぼろんと気のない調子でコードを何度か試す。諦め、ギターを元に戻す。昭和時代の若者は、皆ギターを爪弾いたとあったが、学生には音楽の才能がなく、いくら練習しても上手くならない。きつと昭和時代の若者たちは、一人残らず音楽の才能が、生まれながらにあったんだ。

考えは、やはり研究ファイルに戻る。

どうしようかな……。折角の研究、無駄にするには惜しい。し

かし、どこに持って生きようもない。やっぱり思い切って消去してしまおうか。

ふと学生の視線が、画面の表示に釘付けになった。

【恒星間宇宙船に、あなたのアイデアを！

人類初の恒星間宇宙船は、人類の進歩の証しとして、宇宙殖民を使命としています。しかし、最初の一步については、未だ結論が出ていません。

どのような社会を進むかは、あなたのアイデアによるのです！
どうですか？ あなたのアイデアで、理想の植民星を開拓させた
くはありませんか？】

文面を繰り返し読み、つまりは宇宙殖民の第一歩をこちらに決め
させてくれる、という趣旨らしいと見当をつけた。

学生は閃いた！

友人

「映話！」

命令すると、次に呼び出す相手の名前を告げる。同じ大学に通う友人だったが、学生が文学部で歴史を専攻しているのに対し、友人は物理学を専攻している。ガチガチの理数系である。

暫し、呼び出しが続き、画面が切り変わって、どこかの研究室らしき映像が現れた。

が、すぐ映像が乱れる。画面が真っ黒になったり、走査線が歪んだり、まともに表示できない。

「……っと待ってくれ……こっちで少し電磁波の……ってるんだ……」

声も途切れ途切れである。

やがて映像がシャンとなり、画面に白衣を身につけた、同年齢らしき男の顔が現れる。

ぼさぼさの蓬髪。何日も髭を当たっていないらしく、顎はつつすら黒い。目はぎよろぎよろと鋭く、狂的な輝きを放っている。

絵に描いたような気違い科学者の姿である。もっとも相手は、自分の外見が相手に与える影響を知り尽くしていて、わざとだらしない服装をしている節がある。友人は学生の顔を認めると「やあ」と短く挨拶を返した。

「すまん、ちよつと実験で粒子加速器を動かしていた。それで画面が乱れたんだ。スイッチを切ったから、もう大丈夫だ」

学生は手短に近況を報告すると、恒星間宇宙船の話題を振った。相手は、ちよつと顔を顰め、首を振った。

「あれか……。光速度のたった二十パーセントしか出せない宇宙船なんか、俺は興味ないね。俺は超光速を目指している！ 見ていろよ。俺が？大統一場理論？を完成させたら、重力の秘密を白日のものにして、憧れのワープ航法を実現させてやる。そうなったら、あんな時代遅れの宇宙船は、ゴミ同然の代物さ！」

学生は友人の怪気炎に少し辟易したが、それでも恒星間宇宙船の初期プログラムについて話題を誘導していく。

殖民計画

「つまり、あの宇宙船に、こちらから最初の殖民のためのデータを与えることができる、って話だろう？」

学生の言葉に友人は大きく頷いた。

頷いて、目を細める。

ニヤリと皮肉な笑みが浮かんだ。

「何を考えているんだ？ 受精卵の遺伝子に変更を加えて、例えば女しか生まれないようにさせよう、なんて与太を考えているんじゃないだろうな？ よせよせ、そんなことできても、惑星に女が溢れる頃は、俺たち生きちゃいないぜ！」

混ぜっ返しに学生は手を振って否定する。

「そんなんじゃないよ！ なあ、聞いてくれ。例えば昭和時代の極めて詳細なデータがあれば……例えば雑誌だとか、当時の報道とか、とにかく一切合財のデータが揃っていれば、殖民計画には充分なんだろう？」

友人は目を天井に向け、一瞬ふっと考え込む表情を作る。唇が突き出し「ふむ」と頷いた。

「そりゃあ、な！ しかし、そんなデータの集積、どこにある？ 用意できているのか？」

学生は自分の研究が、指導教授によって拒否された経緯^{いきさつ}を話した。聞いているうち、友人の目が爛々と輝きだした。

「面白い！ つまりは、当時の不良の生態とか、言葉遣いとか、どんなファッションだったのかとか、そんなのが揃っている訳だな？」
学生が同意すると、友人はカメラに向かって身を乗り出した。

「是非、恒星間宇宙船計画に、その資料を提出すべきだ！ 俺に任せろ！ 腕のいいハツカーを知っているから、お前のデータが、どんなことがあっても確実に採用されるよう、細工してくれる。面白い……？ ツツパリ？？ ヤンキー？ の惑星ってわけだ！」

学生は自分のデータを友人宛に送信した。データを向こうのモニターで確認した友人は「くつくつ」と引き攣るような笑い声を上げた。

「こいつは楽しみだ。自分の目で結果を確認できないのが残念だよ……。いや、待て！ 俺が理論を完成させ、ワープ航法を搭載した宇宙船を実現させたら、俺自身で乗り組んで、タイム・ジャンプで結果を見届けることができるかもしれん。うーむ、俄然ファイトが沸々と沸いてきたぞ！」

ぱしん、と友人は手を打ち合わせた。友人は悪魔のような笑みを浮かべたまま、夢中な目つきをして接続を切った。

映話が跡絶えると、学生は「あーあ！」と両腕を突き上げ、伸びをした。

これで自分の研究ファイルは片付いた。
それきり、学生は頭の中から自分の研究ファイルのことを追い出し、教授に指示された課題に全力を傾注した。

後のことは知らない。知りたくもない。

政治

総選挙で【大江戸党】は過半数を獲得し、与党の地位に昇った。

囂々たる野党の非難の中を【大江戸党】は国会で「征夷大將軍閣連法案」と呼ばれる新たな法律を上程し、衆議院と参議院に替わり設置された貴族院・平民院両院を通過させ、立法に漕ぎ着けた。

ここに、新たな征夷大將軍、幕府政權が樹立したのである。征夷大將軍は全国民による選挙で選出されるとされる。

事実上の大統領制である。つまり民主的な封建制であった。初代征夷大將軍に選挙されたのは、徳川家の裔と名乗る人物であった。

もっとも、征夷大將軍に昇った徳川宗家の人物と称する履歴は相当地に怪しく、実際の徳川家子孫は、この騒ぎに無関係であった。

知事は藩主と呼び名を変え、県は藩となった。和服の常用が当たり前となり、急速に、それまで盛んだった明治、大正、昭和の風俗の流行は、廃れていった。全国民は、一斉に江戸時代へと回帰していったのである。

一方、日本以外では、日本語の急速な普及が進んでいった。

かつてラテン語がヨーロッパで、漢文が中華圏で共通語であり、大航海時代にスペイン語、そのスペインをトラファルガー海戦で破ったイギリスの英語が世界共通語になったように、日本語がそろそろ世界中で、必須の外国語となっていた。

世界

ギャル語 二十世紀末の、女子高生同士の会話をそう呼ぶが、簡単な構文と時制の短縮化で簡略化された日本語として普及に一役買った。

つまりピジン日本語である。

ギャル語に必要な単語は僅か二千語で、それだけの語彙で女子高生は世界を表現している。

世界中の人々は日本風の名前を名乗るようになり、会話の中に益々日本語の単語が混入していく。例えば英語の七十パーセントがフランス語起源であるように、日常会話の大部分が日本語起源となっていたのである。

普及の流れはまず「アニメ」「マンガ」などの受容が盛んだった欧州で始まった。日本語受容の流れはアメリカ、南米に広がり、経済圏として重要な地位に上がっていた東南アジア、インド亜大陸でも広がっていく。

モンゴル、東欧諸国のウラル・アルタイ語圏では、もともと日本語と同じ膠着語族であったゆえに、普及は一気呵成に進んだ。最後まで抵抗していた中国、朝鮮半島においても、渋々であるが、日本語が第二母国語として認められるようになった。

国連は事実上消滅し、代わりに幕府の問注所がその役目を果たした。全世界に幕府の出先機関である奉行所、代官所がおかれるようになる。

ここに「大江戸共栄圏」が成立したのである。日本の新たな江戸

幕府を盟主とする、新たな秩序が構築されたのであった。

オルガの公式

人類初の恒星間宇宙船は、直径千キロメートルの反射鏡を展開し、太陽軌道に配置された数百基のレーザー砲からの照射を受け、じつくりとであるが、容赦ない加速を続けていた。

速度は光速度の二十パーセントに達し、普段ない宇宙塵の衝突により反射鏡の数パーセントは失われていたが、機能は充分に果たしていた。

それまで観測されていた宇宙磁場を利用し、宇宙船は反射鏡に電場を懸け、航路を変更し途中の恒星の重力場を利用したスイング・バイ軌道を取って速度を上げる。また、速度を減じるときも使用される。

観測装置が星系のスペクトルを観測し、惑星の位置を突き止めるべく、忙しく働いている。

$$g y'' c$$

惑星の表面重力 $\langle g \rangle$ に、恒星年 $\langle y \rangle$ を掛けた数値が光速度 $\langle c \rangle$ に等しいか近似値である場合、その惑星は人類の居住に最適であるという「オルガの公式」に従って殖民候補星を搜索する。地球に生命が生まれた三十億年前、地球の時点速度は今より速く、この公式が成立していたのである。

遂に宇宙船の観測装置は、有望な惑星を見つけ出した！

宇宙船は地球へ向け、惑星発見の報告をレーザー通信で送信すると、接近手続きに入った。

反射鏡を二つに分割し、宇宙船は進行方向に船尾を向け、反射鏡を二度反射させたレーザー光線によって、今度は減速を開始する。

最後に惑星系の主星にぎりぎりまで近接し、減速を懸ける。強い輻射熱と放射線が宇宙船を無慈悲に炙り上げる。無人の宇宙船でなければ採れない軌道である。

惑星系に近づき、それまで宇宙船を運んでくれた反射鏡を切り離し、宇宙船は衛星軌道に乗った。

質量、地球を一として〇・九六！ 表面重力〇・八八！ 大気組成も、理想的であった。宇宙船の一部分が衛星軌道から離れ、地上へと降下を開始する。

宇宙船の内部で、人工胎盤により植民者たちの育成が開始される。やがて数年後、最初の植民者が最初の一步を踏み出し、殖民計画のためのロボットがヨチヨチ歩きの植民者たちを育て、成長するだろう。

問題

宇宙船が地球を出発して、すでに三世紀が経っていた。

が、宇宙船のメイン・コンピューターは、殖民計画を開始するときに、人間で言えば「困惑」に近い状態に陥っていた。

殖民の初期条件を定義するプログラムが見当たらないのである。替わりにあったのは、別の膨大な資料の塊であった。

あの「？ツツパリ？？ヤンキー？研究」のファイルであった！
学生が提出したファイルを宇宙船のメイン・バンクに納めるさい、無理矢理ファイル形式を変換し、記憶させたため、他の重要なファイルを削除してしまったのであった。ハッカーによる致命的なバグであった。

宇宙船は問題を解決するため、地球と連絡を取ろうと試みた。宇宙船をここまで送り届けた地球のレーザー砲は、それ自体で強力な送信機となる。

が、いくら地球の方向に受信機を向けても、地球のデータは一向に感知されなかった。地球で、何か、大変なことがおきている可能性があった。宇宙船は独力で問題を解決しなければならなくなった。

宇宙船のコンピューターはそれでもかなりの冗長性を与えられている。たとえメイン・プログラムに重大な瑕疵があったとしても、なんとか自分で問題を修正し、植民者の安全を守るよう問題解決の能力を与えられていたのである。

コンピューターは手許に残された学生の研究ファイルをつくりと吟味した。

一応、ある社会の、一貫した資料が揃っている。首尾一貫した論理と、規範がそこにはある……ようだ。

コンピューターは手元の資料を翻訳し、社会形成のプログラムとして再構成を開始した。

決断が下され、コンピューターは最初のプラントを建設した。プラントからは植民者の生活のための食糧、住居、衣服などの生活必需品が続々と生産され、その他の生産品も順次プラントが完成した後、手許へ送り出されるだろう……。

奇妙な形であるが、惑星にはある社会が作り出されていった……。

銀河幕府

地球では戦争の影が忍び寄っていた。

大江戸幕府が事実上の盟主となった地球に対し、火星、小惑星帯、土星の衛星タイタンなどでは反感が高まっていた。独立の気運が高まっていたのである。

恒星間宇宙船を送り出すことに重要な役割を果たした太陽軌道上のレーザー砲門は、それ自体で極めて強力な武器となる。各惑星連合軍は、太陽軌道レーザーを占拠し、地球に対し独立を認めるよう脅しを掛けた。

地球もまた惑星連合に対し、支配権を確立するため世界中の国々に招集を掛けた。応じる国もあったが、反対に惑星連合に帰属しようにとする動きもあった。もう、遠く離れた恒星間宇宙船のことなど構っている暇はないのである。

太陽軌道上のレーザー砲を、どちらが多く占拠するか of 戦いであった。地球と惑星連合同士の宇宙戦争が勃発した。

後に「宇宙の関が原」と呼ばれた戦いが繰り広げられ、月面植民地が最終的に惑星連合を裏切り、態勢は決着した。

この後、地球で最初に「大江戸」に味方した国家は親藩とされ、惑星連合の植民地は外様藩という扱いを受けるようになる。

戦いの最中、地球のある大学の研究室では、画期的な理論が発表された。

四つの力「弱い力」「強い力」「弱い相互作用」「強い相互作用」を統一する理論である。すなわち「大統一場理論」だった。

重力が人工的に作り出される理論は、それまで夢物語であったワープ航法を現実のものとしたのである。

新たな理論で完成した超光速宇宙船は、それまで旅立った無数の無人殖民船の航跡を辿り、地球からの援助がないまま独自の発達を遂げた殖民星を再発見する。

「大江戸」幕府は早速、出先機関である奉行所、代官所を設置したが、地球での戦争の結果に鑑み、強制的な支配権は放棄することにした。

殖民星は地球とあまりに違った発展を遂げ、「大江戸共栄圏」に組み込むにはそぐわなかったのである。殖民星は「大江戸」幕府にとっては、外国と同じ意味を持つ存在であった。慎重な交易が始まり

「幕府支配による平和」バクス・バクフが樹立されたのである。

この物語の主人公、たじまよのすけ但馬世之介は、そんな平和な時代に生を受けたのだが……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0902s/>

温故知新～ウラバン！前史～

2011年4月11日09時34分発行